ジャーナル活動報告

竹下 和亮

7 月 11 日から 12 日にかけて、印刷媒体資料班はマドリード大学名誉教授アルベルト・ヒル・ノバレス氏の報告をもとに「近代スペインのアジア・アフリカ認識をめぐって」と題する研究会をおこなった。近代スペインの他者認識については、イギリスやフランスに比べてその重要性に見合う関心が充分に注がれてきたとはいい難い。その点でも今回はたいへん貴重な報告会となった。

初日の 11 日には、ゴンサーロ・デ・レパラス (1860-1939) のアフリカ主義 (モロッコ植民地建設推進) についての報告があった。レパラスは、アフリカ主義者として出発しながら、王への失望から内戦期には名だたるアナキストとして活躍するという非常に複雑な人物である。ノバレス氏が「体系的にそのデータをすべてコンピューターに打ち込みたいほど」とまでいう彼の著述の豊かさについてここで紹介し尽くすことはできないが、ひとまずレパラスのアフリカ主義を特徴づける「平和的侵入」(penetración pacífica) という概念を出発点として彼の思想を簡単に整理しておきたい。

98 年以来の厭戦的な雰囲気のなか、レパラスは、モロッコのスルタンの主権を尊重しつつ、地域を「浄化」し、病院や学校を建て、道路を整備する、といった社会問題への対処をつうじて、つまりそうした「平和的な」手段によってアフリカへの影響力を強めよと提唱する。もちろん、あくまで武力を背景にした侵略にこうしたスローガンを用ること自体が目新しいのではない。興味深いのは、レパラスのアフリカ主義がスペインによる「文明化」の使命をはっきりと意識していたことである。そしてその背後にはポルトガルやカタルーニャを含んだかたちで構想された彼のイベリア主義があり、その両者の結びついてることがレパラスのアフリカ主義を独自なものにしている。

ノバレス氏の報告によれば、彼のイベリア主義はスペインに伝統

的な連邦主義とは異なっているのだという。ノバレス氏も示唆するように、彼のイベリア主義の幾分かは、おそらくボダンやモンテスキューの名とともに想起する人もあろう、西洋における空間認識の主要な形式ともいえる気候風土論的な地理感覚に基づいているといえる。一個の政治社会は自然本性からして目的論的に進行を定められているのであり、人為的な強制はそうした進行をゆがめてしまう。我々はその順調な歩みをただサポートしてやればよいのである。スペインで制定作業中であった憲法にたいして彼が、「自然な憲法」(Constitición natural) であるようにとの注文をつけたのはこの意味においてであろう。レパラスの考えるところでは、こうした憲法の形成を阻害してきたのが王権であった。半島全体を統合する国家をつくることができなかったそのような王権の無能さにたいする苛立ちは、レパラスのなかでアフリカの「文明化」に非協力的な王権にたいする怒りと結びつき、その果てに彼をして反王政的な人物に仕立て上げていくのだと考えられる。そうしたなか、レパラスはその思考の重心を植民地主義から無政府主義へと移していくのである。独特の地理=歴史意識に支えられたこうしたレパレスの軌跡は、世紀転換期スペインの一知識人に対する関心をこえて、ノバレス氏が「ヨーロッパの罪」と言い切る「文明化」を標榜した諸国間の比較へと導く手がかりを与えてくれるのではないだろうか。

翌 12 日におこなわれたノバレス氏の報告は、時代を遡り「19 世スペインのオリエンタリスト―シニバルド・デ・マス」である。シニバルドが死ぬのは 1868 年なので、その死に入れ替わるようにしてレパレスが生まれたことになる。まず表題にある「オリエンタリスト」についてだが、これは一般的に西洋近代の東洋研究を支えた知識人のことであり、知の形式としての「オリエンタリズム」と権力の諸形式との共犯的関係において問題とされた「オリエンタリスト」のことではない。つまり今回の報告は、シニバルドの知の営みを非難することを中心に組み立てられたものではないということは確認しておきたい。

シニバルドは書家にして画家であり、古典語につうじた文人である。同時にパレスチナやエジプト、ペルシャや中国を訪れた旅行者であり、専門の外交官でもあった。このようにシニバルドの関心は多岐にわたっており、レパラスの場合にもましてここでその要約をすることはできない。よってただ一点だけ、『中国とキリスト教徒の諸大国』(1861 年) におさめられたアヘン戦争にたいする彼の評価についてのみに言及しておこう。

単純化していえば、彼の主張は、アヘンは酒や煙草に比べて特に有害というわけではなく悪いのは摂取の仕方だということである。彼は自分の主張を裏付けるために様々な証拠史料を突き合わせるのだが、注目すべきはそこで自分の実際の経験を論拠として提出することに心をくだいていることである。アヘンを自ら試してみたばかりではない。語学の天分をいかして直に現地の人間に語りかけ、話を聞き、自分の目で確かめる。それこそが事実を明らかにするのだ。これは科学的とまではいはないまでも、現代の人間にとってはある種の誠実さを感じさせる態度ではある。またスペインという、戦争の直接的な当事者ではないという意味では中立的な立場からする彼の発言は、それなりに興味深いものがある。だがそこには、この戦争が恥ずべき戦争であったという意識はない。1999 年、彼のアヘン戦争かんする記述のみを抜粋した小冊子がフランスで刊行された。ノバレス氏とともに我々も、ヨーロッパの帝国がしかけたこの恥ずべき戦争にたいする彼なりに誠意のある態度が現在においてなにがしかの意味合いをもつのだとすれば、それが何なのかは問うてみる価値があろう。

その点で最後に想起しておきたいのが、ノバレス氏がレパラスを論じるさいに使用した trabajo modesto という言葉である。批判を急いで声高にあげつらうよりも、ささやかに、慎みをもって仕事を行なうこと。聞けばノバレス氏自身、まさにこの言葉のとおりに、フランコ体制下の歴史学をひとつひとつ解体することに心を尽くしてこられたのだという。そうしたノバレス氏の歴史家としての来し

方に思いを馳せつつ、研究会の報告を終えたい。